

菟田高城(別名無)(国指定史跡)(宇陀市菟田野区佐倉)

いよいよ神武天皇の軍は、八咫鳥の先導あって、大和の宇陀まで進行した。

宇陀市菟田野区佐倉に「神武天皇東征 菟田高城」の碑がある。

日本最古の城跡と表示されている。

城といっても、後世の石垣を積んだような城でもなく、礎石を持つ建造物跡でもない。

ただの野原である。その通りだと思う。軍は着の身着のままで、ここを大和進攻の拠点としたのだ。

この高台を少し降りると、式内社・桜実神社がある。

神社境内に、すごい杉の木がある。「八つ房杉」といい、国の天然記念物になっている。この辺りの歴史の古さを示すものでもある。

高さが14m、目通り周囲8mという老杉である。

屈曲し、変着し、一部が朽ち、また新たな芽を出し、この樹は遠い昔からの歴史をずうっと見続けてきた。

この境内、神武天皇が宇陀の高城に駐屯したとき、その四方に定めた神籬のひとつであろうといわれる。

『記紀』はこの辺りを「宇陀の穿うかち」と呼んでいる。

ここに兄宇迦斯と弟宇迦斯という部族の長兄弟がいた。（『紀』は兄猾と弟猾、ひどい字をあてる）

神武の軍が来たというので戦闘の準備をした。だが、多勢に無勢勝ち目はなかった。

兄宇迦斯は恭順するふりをしてなんとか神武を殺そうとしたが、それを知った弟菟迦斯は兄の策略を密告してしまった。

兄は自分の作った罠で自ら死んでしまった。弟は酒肴を用意して神武の軍にこびた。弟は部族の長として生き延びた。

いやな世界や。兄弟がいちばん恐い。醜い。

先祖から受け継いできた土地に、見知らぬやつが攻めてきたら、部族を守るために戦うのが長の責任や。

兄宇迦斯はけっして悪い男ではない。兄を売った弟の方が狡猾や。

でも勝者の歴史は、兄を悪者としてしまった。

「宇陀のうかち」の地名が今に残る。宇陀市菟田野区の「宇賀志」である。

ここに、宇賀神社がある。

記紀の旅による

『古事記』

故爾に宇陀に兄宇迦斯弟宇迦斯の二人有りき。故、先づ八咫鳥を遣はして、二人に問ひて曰ひしく、「今、天つ神の御子幸でましつ。汝等仕へ奉らむや。」といひき。是に兄宇迦斯、鳴鏑を以ちて其の使を待ち射返しき。故、其の鳴鏑の落ちし地を、訶夫羅前と謂ふ。待ち撃たむと云ひて軍を聚めき。然れども軍を得聚めざりしかば、仕へ奉らむと欺陽りて、大殿を作り、其の殿の内に押機を作りて待ちし時に、弟宇迦斯、先づ参向へて、拜みて曰しけらく、「僕が兄、兄宇迦斯、天つ神の御子の使を射返し、待ち攻めむとして軍を聚むれども、得聚めざりしかば、殿を作り、其の内に押機を張りて待ち取らむとす。故、参向へて顕はし白しつ。」とまをしき。爾に大伴連等の祖、道臣命、久米直等の祖、大久米命の二人、兄宇迦斯を召びて、罵詈りて云ひけらく、「伊賀作り仕へ奉れる大殿の内には、意礼先づ入りて、其の仕へ奉らむとする状を明し白せ。」といひて、即ち横刀の手上を握り、矛由気矢刺して、追ひ入る時、乃ち己が作りし押に打たえて死にき。爾に即ち控き出して斬り散りき。故、其地を宇陀の血原と謂ふ。然して其の弟宇迦斯が獻りし大饗をば、悉に其の御軍に賜ひき。此の時に歌曰ひけらく、

宇陀の 高城に 鳴罽張る 我が待つや 嶋は障らず いすくはし くぢら障る 前妻が肴乞はさば
立楓の 実の無けくを こきしひゑね

後妻が 肴乞はさば ? 実の多けくを こきだひゑね ええ しやごしや 此は伊能碁布曾 。ああ
しやごしや 此は嘲咲ふぞ。

とうたひき。故、其の弟宇迦斯、此は宇陀の水取等の祖なり。

『日本書紀』

秋八月の甲午の朔乙未に、天皇、兄猾及び弟猾を徴さしむ。是の両の人は、菟田縣の魁帥なり。時に兄猾来ず。弟猾即ち詣至り。因りて軍門を拜みて、告して曰さく、「臣が兄猾の逆をする状は、天孫到りまさむとすと聞りて、即ち兵を起して襲はむとす。皇師の威を望見るに、敢へて敵るまじきことを懼ぢて、乃ち潜に其の兵を伏して、権に新宮を作りて、殿の内に機を施きて、饗らむと請すに因りて作難らむとす。願はくは、此の詐を知しめして、善く備へたまへ」とまうす。天皇、即ち道臣命を遣して、其の逆ふる状を察めたまふ。時に道臣命、審に、賊害之心有ることを知りて、大きに怒りて詰ひ詰ひて曰はく、「虜、爾が造れる屋に、爾自ら居よ」といふ。因りて、劍案り弓彎ひて、逼めて催ひ入れしむ。兄猾、罪を天に獲たれば、事辞る所無し。乃ち自機を蹈みて壓はれ死ぬ。時に、其の屍を陳して斯る。流るる血、踝を没る。故、其の地を号けて、菟田の血原と曰ふ。已にして、弟猾大きに牛酒を設けて、皇師に勞へ饗す。天皇、其の酒穴を以て、軍卒に班ち賜ふ。乃ち御謠して曰はく、

菟田の 高城に 鳴罽張る 我が待つや 嶋は障らず いすくはし 鷹等障り 前妻が 肴乞はさば 立
稜麥の 実の無けくを 幾多聶ゑね 後妻が 肴乞はさば 斎賢木 実の多けくを 幾多聶ゑね
是を来目歌と謂ふ。今、樂府に此の歌を奏ふときには、猶手量の大きさ小ささ、及び音声の巨さ細さ有り。此古の遺式なり。是の後に、天皇、吉野の地を省たまはむと欲して、乃ち菟田の穿邑より、親ら輕兵を率ゐて、巡り幸す。吉野に至る時に、人有りて井の中より出でたり。光りて尾有り。天皇問ひて曰はく、「汝は何人ぞ」とのたまふ。對へて曰さく、「臣は是国神なり。名を井光と為ふ」とまうす。此則ち吉野首部が始祖なり。更少し進めば、亦尾有りて磐石を抜けて出者り。天皇問ひて曰はく、「汝は何人ぞ」とのたまふ。對へて曰さく、「臣は是磐排別が子なり」とまうす。此則ち吉野の国櫟部が始祖なり。水に縁ひて西に行きたまふに及びて、亦梁を作ちて取魚する者有り。天皇問ひたまふ。對へて曰さく、「臣は是苞直擔が子なり」とまうす。此則ち阿太の養部が始祖なり。

櫻實神社の東方の分岐を右（北西方面）へ進んだ先にあります。山の中の道を進むことになりますが、上の写真のように「菟田の高城」と記された看板が建っているので迷うことはないでしょう。

道を進んでいくと丘の上のちょっとした平坦な地があり、ここが神武天皇がエウカシと交戦するにあたって布陣した「菟田の高城」とであると伝えられています。当地に「高かき」と呼ばれる小字があるようで、これが「高城」に通じるということで有力な候補地となっているようです。

「神武天皇御東征菟田高城」と刻まれた石碑が建っており、これは明治三十二年（1899年）に治外法権撤廃の改正条約の実施を記念して建てられたものです。

案内板と石碑の建っていること以外には特に何もありません。また木々に覆われているため眺望も利かず、ここが戦の拠点だと言われてもイマイチピンときません。

ただ当地はエウカシの本拠地に比定されている宇賀志地区に隣接しており、また吉野との往来の道である佐倉峠がある交通の要衝であり、神話的要素の強い伝説であることはさておくとしても、こうした条件を踏まえれば確かにエウカシとの戦に際しては合理的な地と言えるかもしれません。

神社巡遊録による

〈天鈴 55 年、紀元前 663 年（即位前 3 年）、吉野の宮滝（宮瀧）に仮宮を造営〉

天鈴 55 年、紀元前 663 年（即位前 3 年）、

神武天皇一行は、八咫鳥命に導かれ井光を通して吉野の宮滝へ到着し、仮宮を造営する。

高倉下は弟猾（おとうかし）の協力を得て、田原→片岡→平尾→大熊と進んで行き、兄猾（えうかし）に協力を要請しようとした。

しかし、兄猾（えうかし）は長髓彦の反乱軍に呼応していたのである。

兄猾（えうかし）は弟猾（おとうかし）を追い返した後、佐野命の存在を大和盆地内の豪族たちに知らせるために使者を派遣した。

長髓彦反乱軍の豪族たちは榛原・宇陀地方に出陣してくることが考えられたので、弟猾（おとうかし）は高倉下にその時に備えて宮奥の剣根命を恭順させることを提案した。

宮奥は桜井市方面から多武峰経由で攻め込まれる地であり、この地を押さえておかないと全面戦争になったとき背後を突かれる危険性があつたからである。

剣根命は恭順した。

高倉下は弟猾（おとうかし）と共に宮滝まで戻りこのことを報告した。

弟猾（おとうかし）・剣根命は高倉下と共に、宇陀市の大東・守道・和田・佐倉のラインを最前線として防衛ラインを形成することになった。

長髓彦反乱軍の豪族たちが榛原・宇陀地方に出陣してくると弟猾（おとうかし）の支配地は、長髓彦反乱軍の豪族たちから三方から包囲される形になってしまう。その不利を克服するために、長髓彦反乱軍の豪族たちが軍を配置する前に兄猾（えうかし）を制圧しなければならなかった。

佐野命は軍を整え、宮滝を後にした。

長髓彦の反乱を鎮圧するために神武天皇は、宇陀方面から制圧した。

津風呂川沿いに遡り龍門岳で桜井市方面の長髓彦反乱軍の豪族軍の様子を調べた。

長髓彦反乱軍の豪族軍は集結しつつあった。

早く兄猾（えうかし）を討たないと三方から包囲される危険性があることが分かった。

佐野命は兄猾（えうかし）の本拠地のすぐ近くの佐倉に高城を築いて様子を探った。

兄猾（えうかし）は部民を集め佐野命軍と戦おうとしたが部民のほとんどは弟猾（おとうかし）に協力を誓っていたので、兄猾（えうかし）に協力を申し出るものは少なかった。

この戦力では佐野命軍と戦うのは難しいと悟った兄猾（えうかし）は、新殿に天皇を畏にかけるための仕掛けを造り、佐野命軍に恭順を申し出た。

弟猾（おとうかし）が畏が仕掛けられていることを察知し天皇に進言した。

しかし、その真偽を確かめてからでないと兄猾（えうかし）を誅することはできないと思った天皇は、道臣命と大久米命に畏の真偽を確かめて、畏が本当であれば兄猾（えうかし）を誅するように命令した。

道臣命と大久米命が兄猾（えうかし）の屋敷に赴いて畏を確認すると弟猾（おとうかし）の奏上したとおりであった。

道臣命は怒って部下に命じて兄猾（えうかし）自身をこの罾の中に押し込んだ。

兄猾（えうかし）は自分の作った罾にかかり死んだ。

道臣命はその死骸を罾から引き出して部下に切らせた。

屋敷のそばの宇賀志川が血で真っ赤になったので、この地を血原という。

兄猾（えうかし）の本拠地は宇賀志の宇賀神社の地である。

穿邑（うがちむら）〔現在の神武天皇聖蹟菟田穿邑顕彰碑のある位置周辺〕に宮を造った。

そして、穿邑顕彰碑周辺の宮を拠点として内牧川を遡った。

三島神社周辺を鎮圧し、田口の血原橋周辺を鎮圧し、宮城（みやしろ）を築いた。

（※）参考 ⇒ 「神武天皇大和討ち」

